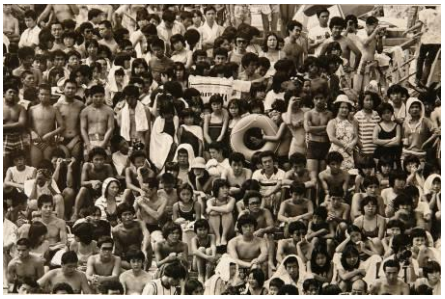
展示作品紹介

●「KU」シリーズ（1962 年頃）
福井大学在学中に福井の街並みや建物の形態を抽象化してとらえた最初期の作品群。習作期の貴重な作品であるとともに、福井の前衛美術運動「北美文化協会」で活動する同世代の作家たちから刺激を受けた経緯もあり、郷土との関わりが深い作品。

●「俗神」（1968-1975）
1968 年から 1975 年に、日本各地を撮影取材。1971 年、フリーランスになる際、自分自身を検証するために、まず日本文化に対峙する必要性から生まれた作品。日本の古い宗教的な空間や祭りの空間、富士山、伊勢神宮、吉野、青森など土俗的かつ時代をまたいで継承した文化、人々を捉えた土田の代表作。



●「砂を数える」（1975-1989）
1975 年から 1989 年までに日本各地で撮影された日本人の群集としての姿。「俗神」が一段落した 1975 年から、ほぼ 10 年間にわたって、首都圏を中心に撮りためたシリーズで、福井の山村を離れ、都市化していく自分自身の存在のありようを対象化する試みから進められた。「お祭り（初詣・花見を含む）」、「レジャー・行楽（遊園地・海水浴・博覧会など）」、「天皇行事」、「街頭・公園」、「学校儀式」、「戦争被災者慰霊」、「メーデー」、「スポーツ・ギャンブル」。日本人が、1980 年代前後の時期、どのような機会に「群集」を成しているのか見て取ることができる。

●「団地」（1973 年頃）
「俗神」での成功後、スランプの時期に、表現の転換点となった未発表の重要なシリーズ。撮れない焦りの日々の中、海外の学生が作った写真集に触発されて初心にもどり、記録に徹した作品を作り始めた。自身が暮らす団地の全世帯の同じ間取りの室内を淡々と記録し、撮影協力が得られない時は廊下からドアを撮った。後の代表作「ヒロシマ 1945～1979」とほぼ同様の手法によるドキュメンタリー。

●「合わせ鏡」（1975 年頃）
双子であることは、土田のアイデンティティー形成の核であるともに、その表現行為をも根底から規定する重要事項であるという。土田と双子の兄の家族が、相互にメンバーを入れ替えながら順列組み合わせで記念撮影。ユーモラスであると同時に、作家の深層心理の闇にも照射するようなスリリングな異色作。

●「パーティー」（1980-1990）
1980 年から 90 年まで、バブル経済に沸く日本の異常ともいえる一時期に、当時どこかしこで開かれていた「パーティー」。「パーティー」というハレの舞台に、華やかな衣装で身を包み、派手なメイクとヘアスタイルで夜な夜な出没する人々の姿を捉えている。「俗神」「砂を数える」に通ずる、日本の群れの姿・日本人の本質といったものがここにも表されている。

●「新・砂を数える」(1995-2004)
「砂を数える」のカラーによる続編。日本のバブル経済が一挙に崩壊していく中、時代のバーチャル化様相を考察している。一つのベクトル方向に動かず、互いに距離を取って群れる姿から、以前の「群れ」の形が確実に変質してきていることを如実に捉えている。デジタル技術を採り入れ、現実味が希薄で予測不能の現代像を展開している。

●「ヒロシマ三部作」
フリーランサーになった 71 年頃より、原爆の惨事を記録する仕事をすべきだという思いから広島へ模索の旅に出る。実際に方法論を決定し、撮りだしたのは 1976 年。被爆体験記「原爆の子」(1951、岩波書店)に出会ってから、数年かけて 30-40 代になった原爆の子の消息をたどり 107 人に取材・撮影した「ヒロシマ 1945～1979」。さらに 1979 年、原爆遺跡を記録した「ヒロシマ・モニュメント」。1980 年に広島平和記念資料館の遺品、原爆資料を商品撮影のように記録した「ヒロシマ・コレクション」へと続く。事件の現場に居合わせず、事件が風化の一途をたどる中で、カメラがいかにして人類史的災厄のドキュメントが可能かを問う写真表現の挑戦。

●「Aging」(1986-2006)　(映像作品)
1986 年から毎日、自分の顔を記録として撮りはじめる。自分の老化に気づいたことが作品制作のきっかけとなった。老人社会や老化の問題を考えるとき、老人ホームの人たちを撮るありきたりのやり方ではなく、セルフポートレイトを定点観測的に撮影する方法を考え出し、現在も続けられている。写真をコマ単位でつなげた動画の中で、土田は 20 分の間に 10 年の歳をとる。

参考:土田ヒロミ　公式ホームページ